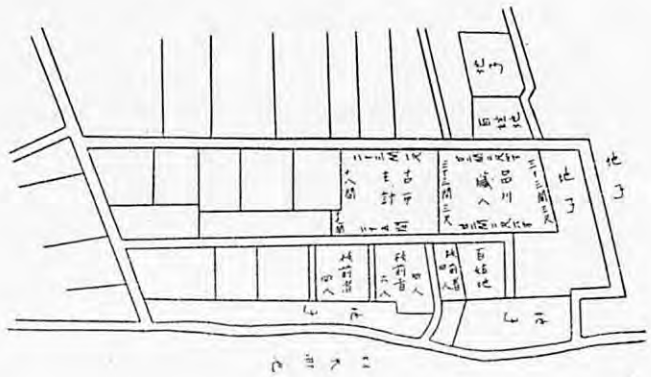

次君御尋之儀在之とて、御家來兩人出向ひ、中土居の宿所へ立寄る處、卒爾の思ひ立必無用也と、利次君種々言葉を盡し被指留ゆゑ、忝仕合長由御請申上、御葬禮の御供して、三宅野より御遺骸を國松寺へ送り、燒香心靜に仕廻ひ、扨人々に何となく暇乞して、終に追腹とげにけり。實にも尊靈御在世には、御前出頭、誠に肩をならぶる人もなし。萬端御用被仰付といへども、竹田市三郎と示合せ、何事とても埒明きて、只流るゝ水の如く也。といへり。三州志鞬囊餘考に云ふ。古市左近胤重、十一月廿九日小松國松寺にて自盡、介錯小塚宗右衛門也。永訣の詩あり。

不堪君惠赴黃泉。貴命切遮時暫還。三十四年風一陣。吹開物外雪花天。

左近は市三郎と同日に死せんと思ひしに、利次君に死を留められしに依りて後る。故に承句之をいへり。左近殉死の後、寛文元年遺知三千六百三十石を弟主計相續し、奏者役を勤め、延寶三年四月病死す。遺書なき故家斷絶すといへり。平次按ずるに、野田山に古市氏の墓地あり。主計胤宗碑陰記に如左載之。

主計君。姓清原氏。古市氏。諱胤宗。後改名務本。其先世領和州古市邑。因以爲氏。曾祖父祖父同稱播摩守。相繼居古市城。父諱胤家仕于近衛藤信尹公。任內史。轉除左親衛。叙爵朝散大夫。娶丹波赤井氏。有子。男三人。女二人。長胤□有故爲浮屠。次胤重號左近。次則胤宗也。寛永十有九年歲次壬午二月十有七日。產于伊賀上野。數歲來賀州。從胤重奉仕黃門公。被寵眷。恒侍左右。稍長賜食祿五百石。黃門公卽世也。胤重三良之哀焉。(脫字カ)今羽林公令胤宗爲胤重嗣。食其祿三千六百石。旣而□爲典謁。延寶五年四月十有一日。歿于金澤私第。享年三十有六。以同月某日葬之金澤東南野田山。配奥村庸禮女。生一女。不肖甥品川直幸謹誌。

右碑石雨露に磨滅して、文字旣に滅亡せしを、漸く勘讀して爰に載す。古市氏の來歷此の碑文にて知られけり。配奥村氏の碑陰記ありといへども、文字全く滅亡して詳かならず。自餘の碑石追々轉倒せしが、いつしか紛失して、今主計夫婦の碑石纔に殘れり。實に嘆息すべし。

○品川左門雅直傳話

三壺記に云ふ。萬治元年十月十二日玄猪の御祝とて、小松城中別けてさゞめく云々。漸く御夜詰も過ぎ、奥へ爲入給ふ。暫有りて御雪隱の廊下通りにて、御目舞心にや有りけん、其の儘下に座し給ひ、左門々々と二聲爲呼られければ、當番別所三平・武本三七走り寄り見奉れば、はや御心氣ましまさず云々。品川左門は、迚も御供とは思ひ定めけれど、暫時にても染衣の姿と成り、御靈前の燈明かゝげ奉らんとて、夜晝怠りなく勤行あり。心ざしこそ殊勝なれ。さて三宅野にて火葬なし奉り、御遺骨を國松寺へ移し、高野山へ御送行の用意ありしに、品川左門は最早心に懸る事なし。高野へ御供せんと、夫々に遺言して、住馴れし枇杷嶋を今を限りと立出で、金澤へこそ赴きけれ。矢田治左衛門・小嶋九右衛門・岡本平兵衛・櫻井左七・河口八郎兵衛、彼等を初め、小松に詰めし者ども、我も〳〵と相伴ふ。左門道すがら語りけるは、君末期に及ばせ給ふ時、我等を召給ひけれど不有合して、御存命の御用承り殘したり。嘸や待たせ給ふらんと、涙を袖にかけ橋や、日頃見馴れし天神の御堂を遙に見上げつゝ、是を限りと打詠め、行末は北の空にして、いつもかゝれる黑雲の、晴間まれなる越路也。爰は小